

特集

熊本大学大学院生命科学研究所 循環器内科学分野教授就任のご 挨拶―熊本の循環器病学の更なる 発展へ向けて―



大学院生命科学研究所
循環器内科学分野教授
辻田 賢一

平成二十八年十月一日付で、平成二十七年九月をもってご退任された小川久雄第二代教授の後を受け、熊本大学大学院生命科学研究所循環器内科学第三代教授を拝命いたしました。一言ご挨拶を申し上げます。

私はふるさと熊本に生まれ育ち、平成十年に熊本大学医学部を卒業後、当時泰江弘文初代教授が主宰しておられた熊本大学循環器内科学教室に入局いたしました。熊本病院、関連病院でカテーテル治療を中心とした循環器臨床を幅広く研修したのち、平成十九年心筋虚血再灌流傷害のテーマで熊本大学大学院の学位(医学)を取得、その後米国コロンビア大学で血管内超音波などの冠動脈生体内イメージングをテーマに研究を行いました。平成二十一年に帰国後、小川久雄前教授のご指導を仰ぎながら、抗動脈硬化治療戦略開発に従事し今日に至っております。

皆さんもご存知の通り、熊本の循環器地域医療はその救急医療体制の充実から全国の地域医療モデルになってまいりました。これからの循環器医療は従来の地域救急医療からさらに大きく進歩し、一、虚血性心疾患・不整脈のみならず弁膜症・大動脈疾患・末梢動脈疾患に対する低侵襲カテーテル治療の進歩、二、重症心不全に対するデバイス治療および補助人工心臓など極めて高度化・先進化してまいります。当院は、県下唯一の特定機能病院として、これら循環器診療のトレンドを察知し、全ての県民の皆様の世界標準の高度先進医療を提供してまいります。近年は循環器疾患の内科的介入と外科的介入がボーダレスになり循環器内科医と心臓血管外科医のディスカッションが不可欠となりましたので、平成二十九年一月当科・心臓血管外科・救急部の三分野で「心臓血管センター」を立ち上げ、共同で治療を行っております。また外来においては「熊本県循環器診療ネットワーク」を構築し病診連携・逆紹介を強化しておりますので、診断・治療に難渋するあらゆる循環器疾患患者様をお気軽にご紹介頂ければ幸いです。

もちろん、当科伝統の臨床・基礎研究にも引き続き注力していきたいと考えております。日本の循環器疾患の様々なエビデンスはこの熊本の地から発信されましたが、そのすべては、肥後医育振興会をはじめ県内外の一般医家の先生方からの臨床データの積み重ねでありました。今後も、医育寮「再春館」以来の肥後医育の伝統を発展させるべく、「熊本から世界へ」を合言葉に教員一丸となって基礎研究・臨床研究を推進し、リサーチマインド溢れる循環器内科医を養成してまいりますので、皆様の変わらぬお力添えを何卒よろしくお願いいたします。

熊本大学大学院生命科学研究所 泌尿器科学分野教授就任の ご挨拶



大学院生命科学研究所
泌尿器科学分野教授
神波 大己

平成二十八年十月一日付で熊本大学大学院生命科学研究所泌尿器科学分野教授を拝命いたしました神波大己(かんぱともみ)と申します。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

私は平成四年に京都大学医学部を卒業し、前教授の吉田修先生(現 京都大学名誉教授、天理医療大学学長)が主宰される京都大学泌尿器科学教室に入局いたしました。大学で一年間研修した後、岡山県の倉敷中央病院泌尿器科で荒井陽一先生(現 東北大学泌尿器科教授)から手術や臨床研究の手ほどきを受け、滋賀県立成人病センターでは自由な雰囲気の中で、また週一回外科の手術に参加する機会を得て、泌尿器外科医としての基礎を作っていたいただきました。平成十一年に京都大学大学院医学研究科に入学し、泌尿器科教授の小川修先生のご推薦により

病態生物医学教室教授の日合弘先生のご指導のもと、腎形成不全モデルマウスを用いた腎発生に関する研究を行い、医学博士の学位を取得しました。平成十五年から二年間カリフォルニア大学サンフランシスコ校解剖学教室の McDonald 教授の研究室に留学し、当時盛んに開発されていた分子標的薬 TKI が正常血管に及ぼす影響について研究する機会を得たことで、臨床に還元できる基礎研究の魅力を学ぶことができました。

平成十七年から京都大学泌尿器科に戻り、泌尿器癌に関する臨床研究や基礎研究に取り組んでまいりましたが、中でも医師主導型多施設共同第三相ランダム化比較試験(ZAPCA試験)は、企画から論文文化まで完遂することができ、私にとつてその経験は大きな財産となっております。診療においても放射線治療科と合同の前立腺癌ユニット外来といった診療科横断的連携、また腹腔鏡やロボット支援手術などの低侵襲手術に積極的に関わらせていただきました。

このように小川修教授をはじめ、京都大学泌尿器科の先生方に大きく育てていただきましたが、これからは私が後進を育てることで恩返しをする番だと考えております。熊本は震災からの完全復興を目指し前向きに進もうとしております。私もそのようなエネルギーを肌で感じながら、安定した泌尿器科診療を実践しつつ先進的医療にも取り組むこと、後進に泌尿器科の魅力を伝え次世代の人材を育てること、若い泌尿器科医の目が輝くような研究環境を作り出すことを目標に、